

風流抄

舟橋聖一

舟橋聖一

風流抄

文藝春秋新社



抄 流 風



昭和二十九年十二月三十日 初版
昭和三十年六月十五日 六版

著者 舟橋聖一

發行者 車谷弘

印刷者 北川武之輔

發行所 株式會社

文藝春秋新社

東京都中央區銀座西五ノ五
振替口座東京七八七四三番

印刷 細川活版所
製本 中島

定價 二九〇圓
地方定價 三〇〇圓

Printed in Japan

目 次

熱海という名の温泉街 五頁

G ストリングの哀愁 五十九頁

信濃路の女たち 九十一頁

京舞妓・だらりの帯 百二十三頁

赤線風流抄 百五十七頁

雨に濡れる赤坂 百九十三頁

加賀の湯女 二百二十七頁

街の女とドヤ 二百六十三頁

函繪・扉繪

安田毅彦監修 東をどり上演、舟橋聖一作「瀧口時頼
の戀」の舞臺裝置下繪による

寫眞

著者と祇園の舞妓・・・・・・・・表見返シ
淺草カジノ座樂屋の踊り子たち・・・・六十四頁
信州の溫泉場風景・・・・・・・・百十二頁
祇園點描・・・・・・・・百二十八頁
秀駒その後、新橋まり千代と著者・・・・二百二十四頁
化粧する舞妓たち・・・・・・・・裏見返シ

カメラ 樋口 進

風
流
抄

熱海という名の温泉街

温泉と云えば、朝から夜中まで、休みなくこんこんと自然湧出している湯のことであつて、箱根の塔の澤とか、伊香保、鹽原、修善寺などは、湯量が豊富で、温泉らしい温泉と云うことが出来る。熱くもなく、ぬるくもない湯にとつぷりつかつて、湯槽から縁をこして、あまつた湯が、サラサラ、サラサラ、微かな音を立てて流れ去るに任じている感じは、いかにものんびりと贅澤で、しかも夜更けなどで、他の浴客もなく、悠々一人で、浴室を獨占している時などは、しみじみ、わが生の喜びを思うことさえある程だ。せいぜい、シャワーなどで身體を洗っている外人の沐浴のみじめさとはくらべものにならないのである。

ところが、熱海温泉となると、温泉とは云い條、箱根や伊香保のように、豊富というわけにはいかない。これは、云うまでもなく、温泉を電力で上げているからである。戦時中から戦後へかけ、そして現在に至るまで、電力の缺乏、麻痺は全國的で、敢て熱海のみには限らないが、温泉を上げるのに、電力に依存する以上、自然湧出の塔の澤や鹽原に對して勝味はない。大體、電力が現在のように、その經營者の無能と怠惰と嘘八百によつて、恐るべき衰弱に委し去られない以前でも、温泉が湧くのに金のかからない自噴泉と、電力料金を支拂つて汲み上げる電力泉とは、大變なハンデがあるのは當然である。

だから、熱海のお湯は、いつもこんこんとして、休みなく湧いているというわけにはいかない。ここも東京電力の支配下であるから、週に何回となく、休電日が實施されることは、東京に異らぬが、その停電中は、温泉場に滞在していても、入湯するわけにはいかないのである。また、電氣のついでに間でも、そういう窮屈な事情のあるお湯を、ドンドン使つてしまうことは、他の浴客の迷惑になりはしまいかという心づかいのために、なるべく、儉約しなければならなくなる。伊香保や箱根のように、あまつた湯をサラサラと流すにまかせることなどは、とても、勿體なくて、出来ない話だ。それでも旅館はまだいい。一般市民の家庭では、時間制にしばらくして、湯槽はあつても、温泉の出るのは、ほんの暫くの間であり、何かの用事で、その時間を逸してしまえば、もはや、入りたくとも、コックからは、一滴二滴のあまり水が、しただりおちるにすぎない有様である。

然し、それでも、東京や大阪や、その他の温泉のない都會地の人々にくらべたら、どの位、お湯に恵まれているかは、問題外である。

どの旅館にも、大浴槽、中浴槽があり、ほかに家族風呂、婦人風呂、夫婦風呂など、いくつも出来ているのが普通だ。いくら、時間制と云つても、浴客なら、少くとも二回、多い人なら、三四回。一般市民でも、一日に一回乃至二回は入ることが出来るのだから、東京のアパート生活者などが、入浴に飢えている實狀からすれば、やはり勿體ない話である。

旅館ばかりでなく、糸川べりの私娼街の家でも、二つ乃至三つ程の浴場を持つていないものはない。もつとも、熱海大火後すぐの頃、焼地に、ブクブク、わいている野天の温泉に、糸川の女が、傘をさして入湯している風流を見て驚いたことがあつたが、焼けぶとりの今の糸川は、堂々たる娼家の軒を並べ、海岸通りからでも、一目に見わたせるように、股賑を極めている。

——時代の奔流というものは、恐ろしいものである。

昔、有名だつた所謂大旅館が、次ぎ次ぎと衰亡したのは、彼らが長い湯治客を最上の顧客として、國鐵の熱海線敷設に、反對したためだと云われている。彼らの反對理由は、鐵道敷設の影響として、交通が便利になりすぎ、たまたま來熱した浴客が、すぐ又歸つてしまう。温泉宿の生計は、長期滞在の湯治客があればこそ成り立つが、三日や四日で、すぐ歸るような客では、經濟の餘裕のない客にちがいないから、そういう貧的な階級をあてにしたのでは、大旅館の維持經營は困難となるばかりである。まして一晩泊りや、せいぜい二晩ほどの客が、土曜日だけやつてきて、あとの日は、ガランとしてしまうようでは、熱海の宿屋は、恐らくみんな、潰れてしまふだらう。熱海へなるべく、長く滞在して呉れる、懷ろ具合のいい客を吸いよせておくためには、あまり交通が便利になるのは、考えものである。寧ろ、人車とか輕便とかで、往復に億劫な位のほうが、旅館業はやりいい——という意見が、もつともらしく、行われたためだそうである。

にもかかわらず、熱海線は開通し、つづいて、丹那トンネルの竣工と共に、東海道本線の一驛として、上り下りの特別急行まで、停車するようになったとき、古い旅館主たちの反対意見などは、今更ら、誰も顧るものはなかったばかりか、この頑迷な保守的頭腦の持主たちは、時代の流れに抗し切れずに、追々と退場、没落、自滅への道を急いで行つたという――。

汽車や電車が走るようになってから、湯治場温泉熱海は、娯楽場温泉熱海に變貌した。いや、せざるを得なかつた。というのが、熱海へ来る浴客の大部分が、長期滞在を望まず、一泊か二泊、長くても三泊を出ないようになったことは、たしかに、長期客を追つ拂うことでもあつたが、その代りに、同時に、「肺患療養」の熱海という暗い印象を拂拭することも出来たのである。「熱海と五十名家」という古書（といつても、大正九年の發兌であるが）に、

「熱海は明治十八年三月以降、衰微の極に達したことがありました。それは、熱海には肺病患者が多く、滯浴してゐるから、其の地へ行くのは危険である。殊に熱海の鶏は、結核菌のある患者の痰唾を食するから、その卵にも、微菌がある。これを食してはならぬなどと、實地に遠い醫者が、根據もないことを、時事とやまとの兩新聞に、喋々と掲げられたのです。

第一に、知識階級の諸官員らが、恐れを抱いて、熱海行は危険であると騒ぎ出したので、誰も彼も、之れに雷同したから、熱海の浴客は、著しく減少したのです。たまに來客があつ

ても、東京から鶏卵を持参したり、わざわざ小田原から買つて來たり、又、客室を一々、消毒したりする有様で、いくら私共が辯明しましても、安心して下さらないのでした。(中略)

そこで、東京和泉橋の内務省分析所長の中濱博士に出張をお願ひして、熱海の土や、吸汽館とか宿屋などの疊の埃を分析して、研究して戴いたり、又北里研究所の北里博士を招聘して、温泉寺で、その講話をお願ひしました。それから、夜具に敷布をかけること。その敷布は間歇泉の熱湯で、二十四時間蒸すこと。浴客の痰唾は、一定の捨場所を設けて、消毒の上棄てること。温泉組合では、たがひに申合せて、肺病患者は宿泊を斷ることに致しました。それでも世の人は、なかなか安心して來浴してくれませんでしたから、熱海の打撃は非常なもので、容易には、その惡宣傳から恢復が出來なかつたのです。(下略——筆者は石渡喜一)」

とあるのに據つても、その當惑ぶりが察しられる。もつとも、肺患の療養法にも變遷があり、明治大正には何ンでも海岸地帯が可とされたが、その後は、海より山のほうがいいということになつて、富士見高原とか、蓼科とか、萬座とかいう高原地帯に、療養好適地の看板が移動したことも、熱海を娛樂温泉場へと變貌させる一助をなしていることだろう。

事實、私などが、まだ子供の頃は、肺病と云えば、七里が濱か熱海であつた。そして肺病という病氣が、世人から忌みきらわれたことも、その當時が絶頂であつたようだ。肺病は空氣傳

染だから、その傍へ行くだけでも、うつてしまふと云われたのだ。今日からすれば、文字通り、隔世の感と云わなければなるまい。

今の文中に、吸汽館という名が出ているが、本來は噓氣館というむずかしい字を用いている。大湯の傍にあつたもので、由來は、故岩倉右府が、吸氣の病患に効あるを察して、宮内省にはかつて經營せしめたものだという。元衛生局長長與專齋氏が、専心之れに當り、明治十八年二月、經營を開始した。幾何もなく二十四年四月、本館を温泉宿業者一同に下賜された。噓氣館は、館内の中央に位し、大湯沸騰の度に、その蒸汽を館中に導き、患者をして之れを吸入せしめる裝置があつたのである。その後、間歇泉の沸騰が止まつたから、吸汽館も廢止の運命を辿つたが、私が年少にして、祖母に熱海へ件られたときには、まだこの吸汽館も、吸入器の裝置も残つていて、ノドの弱い私は數回ならず、これによつて、濛々たる湯氣を吸いこんだ記憶がある。

○

人車が輕便になり、輕便が汽車になり、支線が本線になり、更に湘南電車となつて、熱海は發展をとげ、これに反對した大旅館が没落の運命を辿つたことは、今、述べた如くであるが、その次ぎに、熱海を襲つた問題は、糸川べりの存廢という主題だつた。

こんど、熱海へ出かけたとき、土地の有力者といわれる市會議員の久保田さんや、藝妓組合の相談役という肩書の鈴木（五一郎）さんに會つたときの話でも、熱海の發展と私娼の跳梁とは、切つても切れない關係にあるかのようにであつた。

熱海の私娼のはじまりは、「ざるそば」なる綽名で呼ばれたそうである。私娼の名稱は、その土地土地で異なるが、「だるま」とか、「草もち屋」とかの類は、比較的多く用いられている。

熱海の「ざるそば」の如きは、珍とするに足りるが、この「ざるそば」屋が、温泉場の各所に散在していたものらしい。その一方、旅館へ出入して、長期滞泊の湯治客を慰めるためには、師匠鑑札、若しくは遊藝出かせぎ人鑑札等によつて、唄の師匠や踊の師匠が存在していた。その中でも古いのが、小石川傳通院前の坂東三津枝の門弟で、坂東三代吉という女師匠などであつたという。はじめて熱海へ來たのが、明治十年で、その人が大正九年、八十一歳のときの記録に、

「私はね、丁度四十何年、ここで過ごしたんです。長唄は杵屋流です。踊は坂東派です。熱海でいつも呼んで下さつた家は、相模屋さん、それから富士屋さん、樋口さん、玉屋さん、萬屋さん、露木さんなぞです」

とある。これらの旅館の外、古屋、鈴木屋、大黒屋、新玉、うろこや、隠居玉屋などが、古い熱海を代表する旅館だつたろう。

藝者のはじまりは、大正初期で、當座は遊藝出稼人と半々位。また人によつては二枚鑑札で働いた。正式に藝者の鑑札が下り、いわゆる二業組合が出来たのは、大正中期以後であつた。正確な數字ではないが、大正七年頃が、二十七八人。昭和七年頃が、六十人。終戦後が二百人。現在が四百人程の藝者が、この土地で働いている。

然るに、「ざるそば」の變形した糸川は、丁度、芹澤という本屋の横を流れている小川のへりを起點に、そこから、海岸まで、ずらりと軒を並べた私娼街で、以前は焼けない前の大黒屋旅館の浴場のある裏通りが、盛んに、娼女の客を引く場所に當つていたから、大黒屋の風呂に入つてみると、その活況が、まざまざと、聞こえて來たものである。その横丁は、陽のあたらない場所で、極めて狹隘で、不潔で、いかにも、地獄宿らしい雰圍氣であつた。そこに立つ娼女も、見るからに惡疾の持主であるような、皮膚のよごれた女で、新宿や板橋の宿場で、使ひものにならなくなつたようなのが流れこんできていた。もつとも、下には下があるもので、熱海で更にすりきれたボロのような女たちは、そこから又、栃木や千葉、茨城のほうへ流れこんで行くというから、しまいには、鼻がかけても、肉を賣るどん底まで落ちるのだらう。昔、落魄の果て、ソレ突けヤレ突けの、兩國の見世物にまでさらされたあげ句は、船で品川沖へつれ出